お話、その根底にある先生の資料整理は大変勉強になった。ただ、先生からお借りした野帳は、種々の記号が多く、直接先生にお聞きしても解読は難しかった。

不思議な力：先生と一緒の採集会（山行）は、土砂降りになろうが、風が強くなろうが、夜になろうが、どんな状況になろうとも不安が全く出てこない。水の無い場所の幕営では、必ず雨が降り水の心配もいらなくなる。普通の登山家なら、非常識な計画、行動が全て常識の範囲になってしまう。池上先生には、冬の厳しい吹雪の中で山（自然）に同化できるマタギの能力が備わっており、それを参加者全員に与える力があったのではなかろうか。私自身が催眠術にかかったのかも知れないが。

1997年6月28～29日、先生にとっては胃の手術後初めての只見町での調査をお願いした。28日の夜は久しぶりの池上先生来町で、松井新教育長も宿においでになり只見町の自然や植物に対する池上の思いが語られた。29日の朝食はゆっくりした時間となる。朝食後も先生の話は尽きず、調査に出たのはお昼を過ぎていた。3班に分かれ、坪谷氏と私は中島などで調査をし午後4時過ぎ帰路につくと、田子倉ダム左岸で池上先生と川端先生がアカメイタヤやケトチノキの巨木の調査中であった。先生の姿は往年と変ることなく、伸びたザックを担ぎ、いつもの微笑みのある優しい表情であるが熊の手（爪）は、するどく獲物（植物）を採っている。その後も休むことなく暗くなるまで付近を調査・採集し、川端先生の車は植物でいっぱいになった。これが、先生にとって最期の採集行であったのではないだろうか。

1991年下田村教育委員会発行の「八十里越の植物」を見て、只見町教育委員会の新国さん（只見町史編集責任者）から、坪谷さんと私に只見町の植物調査を頼まれ、池上先生にお話すると、「それは引き受けなさい」の一言であった。新潟県只見町と言われる地で、県外の植物には目もくれなかった坪谷さんと二人で引き受ける。調査をはじめると、広く豊かな自然、豪雪地只見の特長として尾根沿いのキタゴヨウや冬の季節風と雪崩によりつくられたアバランチ・シュートと呼ばれる地形、黒谷川を中心に発達した畦畔林など新しい発見があり、池上先生の夢が大きく広がり担当の新国さんの構想もふくらむ。刈屋さん、川端先生にもメンバーに加わっていただき、池上先生にも何度が調査や町民への講話をしていただいた。池上先生の御指導で構想をねり、足かけ6年調査をし資料をまとめ、2001年に「只見町の植物（町民編）」を、2004年に「資料編」を発行する。この間に先生は胃の手術をされ、最後の刊行を見ることなくお亡くなりになられたことは誠に残念至極であった。しかし、この調査がきっかけとなり、只見町のブナ林が世界遺産の候補になり、2005年7月に世界ブナサミットが只見町で開催された。只見町民は当たり前の身近な自然に関心を持ち、地元の自然が貴重な自然であることを理解し、町全体の活性化が図られている。先生の夢が、只見町で大きく開花していることは、微力ながら調査に参加した者として大きな喜びである。

大学卒業直前の山本山採集会と只見町調査の思い出を書いたが、それ以外にも、青海黒姫山、頸城菱ケ岳、光明山、苗場山、飯豊連峰、佐渡、……などの採集会や先生のご自宅の部屋での数々のお話が、すべて懐かしく楽しい思い出として私の脳裏を駆けめぐっています。池上先生「大変勉強になりました。種々の御指導に衷心から感謝しております」「安らかにお眠りください」

池上先生有り難う御座居ます

近田文弘

池上先生からは、今日の私にとって非常に重要な、また意味深い教えを頂きました。それは、農学部の学生であった私を中央の研究者に紹介して、分類学の世界へ導いて下さったことです。そのお陰で、シダの分類学者であった東京大学農学部の倉田悟先生と地方の植物も研究された国立科学博物館の奥山春季先生をお訪ねする機会を得ました。それが、私が植物分類学へ進む大きな機会になりました。著名な先生方の話しと標本の多さに恐れをなしていた私に池上先生は、「なに、たいしたことは無いよ、若い人がやればもっとできるようになるさ」と励まして下さいました。続けて、「日本の標本庫は欧米に比べると本当に貧弱で東大でも国立科学博物館でも、もっと努力しなければいけない状態なのだよ」と話されました。それで大いに気が楽になって、やってみようかな、と思うようになったのです。また、池上先生は野外へ出て、頑張って植物を採集する、ということを身をもって教えて下さいました。生来怠け者の私には難しいことで、今もよくできないで居りますが、とにかく押し葉標本にこだわるということを大切にして、この十年間ほど、人生最後の職場の生活を送ってきました。標本を作ることで、いつも池上先生の御姿を思い出すのは、確か最初に採集会に参加した時のことだと記憶しているのですが、海岸に近い砂浜の小さな池の縁でアズマツメクサを見つけた時のことです。「これは珍品であるから」、と先生はやおら風呂敷を取り出してそれにゴソゴソとそれを詰め込んで、ニコニコされているのです。あちこちの研究者に送ってやるのだということでした。その様子

がまたとても楽しそうなのです。池上先生は、いつお目にかかっても、こちらも愉快な気持ちになる先生でした。今、その時の標本が私の手許にあります。石沢先生の御好意で、私が学生時代に採集した標本は、そっくりそのままに現在、国立科学博物館の標本庫に保管されています。私が採集した標本と、同じ1963年6月15日付けの池上先生採集の標本が出てきました。先生が、あの時、説明された通りに、標本を科博へ寄贈されていたのです。それから、ある時、また海岸へ行く採集会がありました。この時は私の家からあまり遠くない藤塚浜という所でした。砂浜の湿地に淡い赤紫色の可愛らしい花を沢山つけた高さ1mばかりの草本がありました。池上先生は、例の楽しそうな様子で「これは、いいものがあったね。バシクルモンという北方系の珍しい植物だよ」と教えて下さいました。それ以来不思議なことに、バシクルモンが心に残りました。1985年に縁があって中国西域の天山を訪れる機会がありました。あの三蔵法師が天山を越えたと伝えられるアスクという町はずれをながれるタリム河の岸辺で、バシクルモンを見つけました。私にはすぐにそれと分かり、また池上先生との採集会のことが思いだされました。そして、今年は、バシクルモンを目的に、また西域のタリム河流域の砂漠へ行ってきました。日本のある製薬会社がバシクルモンに睡眠を助ける効果を見つけ、それを利用しようという調査です。砂漠でバシクルモンとの再会を果たして、帰国後に標本庫を見ると、1962年6月24日に採集した私の標本が出てきました。実は、アズマツメクサより、バシクルモンの採集の方が先だったのです。この標本には、沢山の開花中の花がついています。この標本と同じ場所で同じ開花中の池上先生採集の標本も出てきました。こちらは1954年7月11日採集です。アズマツメクサとバシクルモンの思い出と標本は、池上先生にお世話になった証しです。標本を手にしながら、心から先生に御礼を申し上げたいと思います。有難う御座居ました。また、心より御冥福を御祈り申しあげます。

私は今年3月末で国立科学博物館を定年退職します。在職した約10年で、70万点程の標本を20万点近く増やすことができました。また、地方的な植物相の調査にこだわってきました。現在、最後の仕事として、昭和天皇が調査された伊豆須崎の植物相の再調査の結果のとりまとめを急いで居ります。池上先生のお教えを心のどこかに置いて来たつもりです。改めて御礼を申し上げて筆を置きます。

2005年11月4日

池上先生のこと

笹川通博

池上先生は私にとって、他の人とは全く違った、特別な人であった。今こうして追悼の文章を書こうと、何か思い出すように努めているが、直に接する機会はそれほど多くはなかった。しかし、先生からは非常にたくさんのことを学び、影響を受けた。私が行う学校での授業も、先生の話し方を真似ている面があると思う。講話や一緒になる機会があると、先生からできるだけ多くのことを学びたいと思い、近くにいるように努め、耳をそばだてた。聖人君子に従う、弟子のような気持ちであった。書物の中の人物ではなくて、尊敬できる人に初めて巡り会えたと思った。県外出身の私は、先生と出会えて、それだけで新潟に来て本当によかったと思った。先生が亡くなられて、私自身も心の柱を一本失い、職場である学校も、社会全体も、大きく激しく流れ、それに自分も流され、先生が持っておられた確かな普遍的なものを、見失っている自分を感じる。

新潟大学の学生だった頃、「新潟県植物分布図集」の原稿を書くと、石沢先生を通して池上先生に渡り、ボールペンの小さい赤字の上に、更に青字で直されて戻ってくる。当時の私はまだ物事がよく分からず、身の程知らずなところもあったので、自分なりに書き直して提出すると、また、細かいところまで赤字、青字で直される。よくよく考えると、確かに、そのように直した方が元の文章よりはるかによい。どんな小さい文章でもそうであった。言葉や文章に対して、大変厳しかった。助詞、助動詞の使い方や、受動態、能動態、言葉の順番、時制など、文章を書くということは、相当の覚悟が必要であると、その時初めて知った。池上先生からは、「七回は直すものだ。」「直された原稿は大切に取っておく。」「頼まれても人の文章は直すものではない。後で恨まれる。」「裏付けの文献を探すのがどれほど大変か。」といったことを、のちに何回もお聞きした。じねんじょ会の植物調査の夜、そんな時でも、ろうそくや懐中電灯の明かりのもとで、先生が熱心に誰かの原稿に赤字や青字を入れておられる姿を、今も鮮明に思い出す。また、私が高校で非常勤講師をしている頃、通勤の越後線の列車の中で、先生と乗り合わせたことがあった。あいさつの言葉を二言三言交わしただけであったが、先生は時折あたりに厳しい視線を投げながら、何か文学関係の文庫本を熱心に読まれていた。「新潟県植物分布図集」の原稿を書く時、池上先生が見て下さるのだからと、甘えてしまった面もあった。

植物に対しても同様であった。どんなありふれた植物でも、池上先生にかかれば、様々な不可思議が説明され、ほ